

学問分野のチューニング
参照基準に基づく内部質保証Tuning the Disciplines:
Internal Quality Assurance Based on Reference Points

深堀 聡子*

FUKAHORI Satoko

Abstract

Redesigning bachelor degree programs based on learning outcomes is one of the priorities of higher education reform in contemporary Japan. The purpose of this paper is to outline the components of the Tuning approach originated in Europe and expanded into other parts of the world focusing on four aspects that are of particular significance within the Japanese context.

Firstly, Tuning is a methodology that aims to build consensus among faculty and stakeholders on what students should know, understand, and be able to do upon completion of degree programs (disciplinary reference points). Secondly, Tuning is a methodology for designing degree programs and courses based on common points of reference while respecting diversity and autonomy of institutions. This is accomplished by defining a coherent list of core competences (reference points) from which an institution can choose what it will pursue (degree profile). Thirdly, Tuning distinguishes competences from learning outcomes. Competences represent dynamic combinations of knowledge, understanding, skills and abilities fostered through the degree program. Learning outcomes, on the other hand, are statements of what a learner is expected to know, understand and be able to demonstrate after completion of learning. By respecting the expert judgment of faculty in interpreting abstract competences to concrete learning outcomes, Tuning supports the academic freedom and creativity of faculty. Fourthly, Tuning provides a methodology for continuous academic enhancement through faculty assessment of student learning, course evaluation, and program review. It provides an excellent model for “internal quality assurance based on reference points.”

While Tuning provides rich implications to Japanese higher education institutions, there are two mechanisms that are missing or limited in most Japanese institutions although they usually present in European institutions. One is a procedure that assures the relevance of assessments of student learning, such as “external examining” and “examination committees,” and the other is a set of codes that assures the validity of program review such as observing “reference points” and “stakeholder input.” These are often unstated but important mechanisms that support the success of Tuning, and that Japanese institutions need to consider adopting if they were to successfully implement Tuning.

* 国立教育政策研究所・総括研究官、チューニング情報拠点・代表者

はじめに

チューニングとは、大学教育を通して学生に身に付けさせたい知識や能力（アウトカム）に関する合意を学問分野別に形成し、その合意に基づいて各大学で学位プログラムを設計して実践するための方法論である。

チューニングは「ボローニャ・プロセスへの大学の貢献」として、欧州の大学によって2000年に発案され、欧州委員会補助金を受けながら推進されてきた。ボローニャ・プロセスとは、3段階の学位サイクル・システムと欧州単位互換累積制度（European Credit Transfer and Accumulation System、ECTS）の導入による学位と単位の枠組みの共通化を通して、欧州高等教育圏の確立を目指す政府主導の取組である。このボローニャ・プロセスを実質化させるためには、大学が主体となり、大学の自律性と多様性を尊重した方法で、教育の質についての共通理解を形成する必要があるという立場から、チューニングは大学の自発的参加に基づいて推進されてきた。そして、欧州の大学を学生や雇用主にとってより魅力あるものに変革するとともに、グローバルな高等教育市場における競争力を強化することが目指されてきた。

チューニングには、日本の大学教育の文脈に照らして、特筆すべき四つの特徴がある。第一の特徴は、大学教員が主体となって大学教育のアウトカムを定義する際に、学生の進路先の雇用主や卒業生と協議することで、学問分野の意義について、学術的観点からだけでなく社会的観点からも検討し、学生や社会に対して分かりやすく説明しようとする点にある。第二の特徴は、学問分野の参照基準（reference points）をコンピテンスの一覧として幅広く定義し、各大学が自らのミッション、資源、学生ニーズ等に照らして、重点的に育成するコンピテンスを選択できるようにすること、すなわち学位プロフィール（degree profile）を定義することで、「大学としての共通性」と「個別大学の多様性・自律性」の両立が図られている点にある。第三の特徴は、アウトカムを大学間・教員間で共有可能な抽象性をもったコンピテンスと、科目を履修した結果として達成可能で測定可能な具体的な学習成果に区別することで、「学位プロフィールとしての一貫性・体系性」と「大学教員の学問的自律性」の両立が図られている点にある。第四の特徴は、アウトカムに基づく学位プログラム及び科目の設計、実践、評価（学生の学習成果アセスメント）、教育改善（コース・エバリュエーション、及びプログラム・レビュー）といった「参照基準に基づく内部質保証」を稼働させることで、大学教育の質保証が目指されている点にある。

こうした大学教育の質保証アプローチとしてのチューニングの有用性は、欧州高等教育圏外でも注目されるようになり、ラテン・アメリカ、アフリカ、ロシア、米国、中国、インド等へと拡大してきた。日本でも、「組織的・体系的な学士課程教育への質的転換」（中央教育審議会、2012年）が注目される中で、チューニングは重要な示唆を提供することが期待される。本セクションの目的は、先に述べた四つの特徴について解説することで、「参照基準に基づく内部質保証」を推進するアプローチとしてのチューニングを日本で導入することの意義と課題を明らかにすることである。

1. チューニングによる大学教育のアウトカムについての合意形成

チューニングでは、2000～2004年までに九つの専門分野（経営学、化学、地学、教育、欧州学、歴史学、数学、看護学、物理学）及び一般的技能について、参照基準としてのコンピテンス枠組みが定義された。さらに、欧州委員会による学問分野別の大学間連携事業エラスムス・シマテック・

ネットワーク（Erasmus Thematic Networks）事業の35分野において、チューニングの方法論を用いて学問分野が定義されてきた（Tuning Academy, 2015）。

チューニングによる大学教育のアウトカムに関する合意形成は、大きく三つのステップで実施される。第一のステップでは、各学問分野の専門家である大学教員が、その学問分野を学んだ学生に身に付けてほしいアウトカムを定義する。第二のステップでは、当該学問分野を学んだ学生の卒業後の主な職業を同定し、学問分野のステークホルダーである雇用主や卒業生等を対象とした調査を行う。この調査では、大学教員が作成したアウトカムの一覧について、それぞれの重要性及び大学教育を通して実際に達成されている程度に関するステークホルダーの意識を問い、大学教員との一致やズレを分析する。最後の第三のステップでは、調査結果を踏まえた専門的協議に基づいて、大学と社会との間で合意された、学問分野の参照基準を定義する（第一の特徴）（Tuning, 2014）。

なお、大学教育のアウトカムについての合意は、学問分野のレベル（参照基準）と大学レベル（学位プロフィール）を分けて検討する必要がある。なぜなら大学は多様であり、それぞれに志向する人材像、学生の教育ニーズや進路先、大学教員をはじめとする教育資源等が異なるからである。大学は、学問分野の参照基準の中から、自校にとって重要性の高いアウトカムを抽出した上で、上述した三つのステップに基づいて、大学と社会との間で合意された学位プロフィールを定義する。その意味で、学問分野の参照基準は、多様な大学が追求する学位プロフィールの「最小公倍数」とみることができる（第二の特徴）。

2. チューニングによる学位プログラムの設計—大学教育の共通性と多様性の両立

チューニングでは、アウトカムを「コンピテンス」と「学習成果」に区別している。チューニングにおける「コンピテンス」とは、知識や能力が有機的に結合したものであり、学位プログラムを履修した総合的な成果として学生が獲得することが期待されている。それに対して「学習成果」とは、学生が科目の履修を通して習得することが期待されている具体的な知識や能力である。科目を担当する大学教員が教育内容（コンテンツ）と紐づけながら決定し、単位認定の要件として、所定の期間内に達成可能であり、何らかのアセスメントに基づいて測定可能でなければならない。

学問分野の参照基準は、多様な大学によって共有可能であるように、一定の抽象性をもつコンピテンスのレベルで記述されている。それゆえ参照基準は大学教育に一定の標準性をもった枠組みを提供するものの、大学教育を画一化したり標準化したりするものではない。さらに、コンピテンスをどのような学習成果に落とし込むかが、科目を担当する大学教員の専門的判断（エキスパート・ジャッジメント）に委ねられることによって、大学教員の学問的自律性が尊重されている（第三の特徴）。

参照基準に基づいて学位プロフィールを定義した大学は、追求するコンピテンスの獲得を所定の期間（欧州単位互換累積制度の第1サイクルの場合は標準3年間：180ECTS）で達成するために必要な科目を配置する。それぞれの科目に割り当てる単位数（ECTS）は、その科目の中で学生に習得させる学習量、workload に基づいて算出する。学習量とは、平均的な学生が所定の学修時間に達成可能な学習成果を指し、25～30時間で達成可能な学習成果が1ECTS相当の学習量とみなされている（図1）。

なお、コンピテンスと学習成果は直接対応しているとは限らない。複数の科目を通して、複数の学習成果が習得された総合的な成果として、コンピテンスは達成されるのである。そして、その妥

当性は、大学教員の専門性に根ざしたエキスパート・ジャッジメント（専門的判断）に支えられている（表1）。

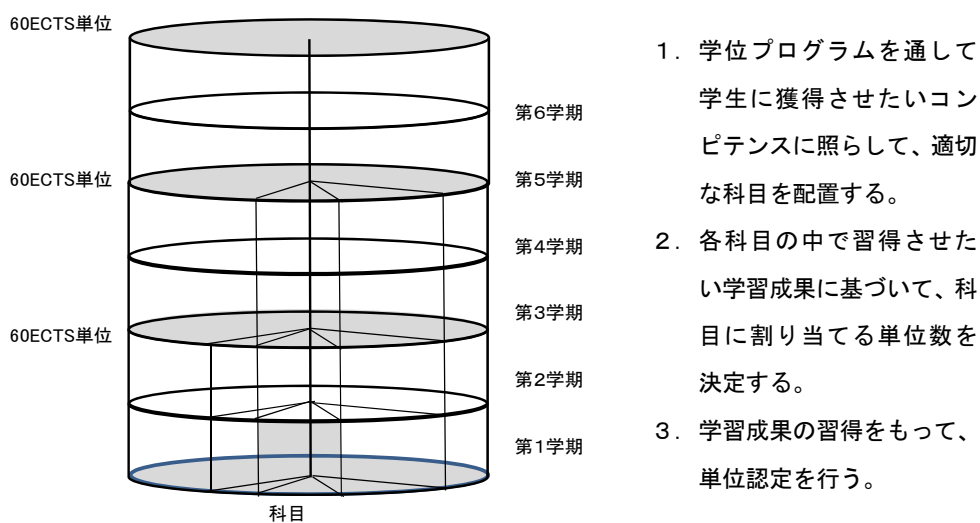


図1. 学位プログラム設計の原理

出典：ゴンサレス・ワーヘナール（深堀・竹中訳）、2012年、34ページに基づいて作成。

表1. コンピテンスと学習成果の対応（例）

複数の科目（1～3）を通して、複数の学習成果（1a～5b）が習得された総合的な成果として、コンピテンスAは達成されたとみなされる

コンピテンスA										
学習成果	1 a	1 b	2a	2b	2c	3a	3b	4	5a	5b
科目1 (4ECTS)	○		○			○		○	○	
科目2 (2ECTS)			○	○	○					
科目3 (2ECTS)		○					○			○

出典：ゴンサレス・ワーヘナール（深堀・竹中訳）、2012年、33ページに基づいて作成。

3. チューニングにおける内部質保証

チューニングでは、学問分野の参照基準に沿って定義された学位プロフィールに基づいて学位プログラムが設計（P1）され、追求するコンピテンスの獲得に適した科目配置と単位割当てがなされる。科目を担当する大学教員は、自らのエキスパート・ジャッジメントに基づいて、コンピテンスに対応する学習成果を設定し（P2）、その習得に向けて最適の教授・学習方法を選択し（D）、学習成果アセスメントを実施して、学生が期待する学習成果を習得することができたかどうかを確認する（C）。さらに、学習成果アセスメントの結果に基づいて、科目の教育計画が適切だったか（コース・エバリュエーション；A1）、学位プログラムの設計は適切だったか（プログラム・レビュー；A2）を確認して、必要な改善策をとることで「教育改善サイクル（PDCA）」を稼働させる（第四の

特徴) (図 2)。

すなわちチューニングとは、大学と社会の協議に基づいて参照基準を定義し、その共通の基盤の上に各大学が学位プロフィールを定義し、学位プログラムを設計して実践する取組である。そして、コンピテンスに対応する学習成果の習得を単位認定の要件とするとともに、学習成果アセスメントに基づいてコース・エバリュエーションとプログラム・レビューを展開することで、参照基準に基づく内部質保証を推進しようとする取組である (Lokhoff, J., Wegewijs, B. Durkin, K. et al., 2010)。

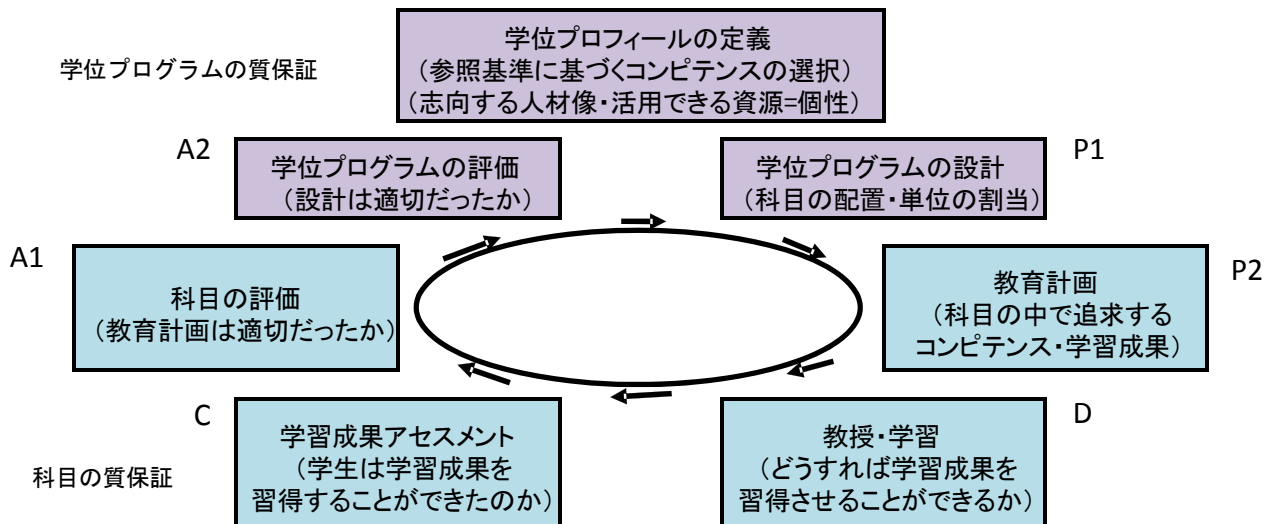


図 2. チューニング教育改善サイクルー参照基準に基づく内部質保証

出典：ゴンサレス・ワーヘナール (深堀・竹中訳)、2012 年、26 ページに基づいて作成。

4. 日本でチューニングを実践する場合の課題

認証評価の第三サイクルに向けて「学修成果と内部質保証」を重視する方針が打ち出され、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーによる教学マネジメントの必要性が強調される中で、参照基準に基づく大学教育の内部質保証を推進する実践的方法の一つであるチューニングは重要な示唆を提供する。その際、日本でその方法を採用する場合に検討すべき課題を 2 点挙げておきたい。

第一の課題は、コース・エバリュエーションに係る課題である。チューニング教育改善サイクルの中で、各科目の教育計画の適切性を評価する際に、学習成果アセスメントの妥当性を確保する必要がある。伝統的に欧州の大学には、他機関の教員等を招いて出題の適切性や評価の妥当性に係る審査を依頼する外部試験員制度 (英国) がとられたり、学内試験委員会が設置されたりといった、担当教員以外の第三者による教育評価に係るチェック機能が組み込まれている。日本の大学では、そうした慣行は一般的ではない。

抽象的なコンピテンスを具体的な学習成果に落とし込み、客観的なアセスメント・ツールで評価するには高度の専門性が必要であることから、それが適切に実施されることを保証する何らかの仕組みが必要といえよう。仮に第三者によるチェック機能を導入しないのであれば、大学教員のエキスパート・ジャッジメントを鍛える研修機会を継続的に設けたりする工夫をすることが、アウトカ

ムに基づく大学教育の質保証を成功させるために必要な条件と言えよう。

第二の課題は、プログラム・レビューに係る課題である。チューニング教育改善サイクルの中で、学位プログラム設計の適切性を評価する際にも、担当教員チーム以外の第三者によるチェック機能が働くことが望ましい。欧州では『欧州高等教育圏質保証基準及びガイドライン』の内部質保証に係る規定に、大学は学位プログラム設計を大学の教育戦略と外部の参照基準に基づきステークホルダー（学生・雇用主）も交えて行うとともに、学位プログラム認可を正式な学内手続に基づいて行うべきことが明記されている。日本の大学では、そうした慣行も一般的ではない。

したがって、「組織的・体系的な学士課程教育への質的転換への好循環を作り出す始点」（中央教育審議会、2012年）とは、学士課程の教育プログラムの設計や評価の過程に、全学的な教育戦略、参照基準、ステークホルダーといった、当該プログラム関係者にとっての外部要素を組み込んでいくことなのかもしれない。

前述した通りチューニングは、趣旨に賛同する大学（学位プログラム）による自発的参加に基づいて展開されており、欧州高等教育圏内外で緩やかな広がりをみせている。日本でもチューニングに対する関心は徐々に高まっており、文部科学省も「国立大学運営費交付金機能強化のための重点支援」や「スーパーグローバル大学創成支援」等の補助金を通して、大学における取組を支援してきた。国立教育政策研究所も、平成27年度より、国際チューニング・アカデミー（International Tuning Academy）の依頼に基づいて、日本のチューニング情報拠点（Tuning National Centre）として、チューニングに関する情報普及を図るとともに、全国規模で取り組むチューニング・プロジェクトをコーディネートする役割を引き受けることとなった。

参考文献

- ゴンサレス, J.・ワーヘナール, R. 編著（深堀聰子・竹中亨訳）『欧州教育制度のチューニング - ボローニャ・プロセスへの大学の貢献 - 』明石書店、2012年。
- 中央教育審議会『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて－生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）』（平成26年8月28日）。
- (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm) (2014年12月1日アクセス)
- European Association for Quality Assurance in Higher Education et al. (2015). *Standards and Guidelines for Quality Assurance in the European Higher Education Area (ESG)*.
- (https://www.eqar.eu/fileadmin/documents/e4/ESG_-_draft_endorsed_by_BFUG.pdf) (2015年5月30日アクセス)
- Lokhoff, J., Wegewijs, B., Durkin, B., Wagenaar, R., González, J., Isaacs, K.A., Donà dalle Rose, L.F., and Gobbi, M. (2010). *A Tuning Guide to Formulating Degree Programme Profiles - Including Programme Competences and Programme Learning Outcomes*.
- (http://www.unideusto.org/tuningeu/images/stories/documents/Tuning_Guide._Degree_programme_profiles.pdf) (2014年11月10日アクセス)
- Tuning. *Tuning Educational Structures in Europe*
- (<http://www.unideusto.org/tuningeu/>) (2014年11月10日アクセス) .
- Tuning Academy. *Tuning Academy Brochure*.
- (http://tuningacademy.org/wp-content/uploads/2015/01/Tuning_Academy_brochure.pdf) (2015年1月10日アクセス) .